

# Computer Report

Vol. 59 No. 2 2月号 (通巻 773号)

## はじめの言葉

■朝鮮半島とのトラブル（と敢えて言わせてもらうが）は、ちょうど一年前の慰安婦および慰安婦像問題から続いているもので、一向に解決される気配がない。むしろ良くない方向で動いている。世界的規模での安定と安全そして安心を得ようとする動静は、今やユニバーサルコンセンサスである（はずだ）。それを具現化するための確認作業が、国家間合意／協定である。それらをことごとく無視し続けている。困った隣国である。

■最早、国家とは言い難い所業である。こうした負の方向での外交政策のツケは、利率的にはともかくも、やがては自国に回ってくる。そういう心配をすればこそ、各国とも時として耐えがたきを耐え忍ぶ。やがて巡ってくる好機を待ちながら。そうした心配一切をしなかったら、楽である。だが、楽は苦の種。より多くの苦として、隣国に巡って来るだろう。さわらぬ神に祟りなし。日本としては、肝に銘じて、さわらぬこととしたい。

■客観的に終戦後の歩みを総括すると、第二次世界大戦の戦後処理は、いまだ未決着ということになってしまう。否、未決の状態に意図的に戻そうとする策動を、隣国が起こしていると考えられる。戦後 70 年余の間、周辺諸国への戦後処理に努めてきた我が国だが、そんな努力もいかに脆いものだったかを改めて知らされる思いだ。否、国家間協定／協約とは、本来、その程度のものだということだろう。

■隣国が、我が国との一連の戦後処理合意を一方的に反故にする様を見て、今、我が国の国民の多くが、国家としての隣国像を根本的なところから見直していることだろう。そして、ある決断を固めていると言ってもいいだろう。佐賀鍋島藩の剣「葉隠れ流」の極意書的一条に「武士とは死ぬことと見つけたり」がある。しかしその大前提に「死ぬる前に徹底的して油断せず、事に臨め」という教えがあるという。

■そういう意味で、我が国は、隣国に臨むにあたり「大きな油断をしてきた」と言わざるを得ない。我が国と隣国との戦後処理は、端から現状に至る歴史背景にあったのだ。我が国から見れば、明らかに裏切り行為と映るが、隣国側からしたら「隙があったから付け込んだ」に過ぎない。これこそが外交だとしたらそれまでだが、隣国の本性／正体を肝に銘じておきたい。もって今後の油断なき隣国外交の基本姿勢として固めておきたい。

■国家間条約における約定破棄／取決め違反は、随所に認められる。北方領土問題も然りである。直近の日ロ外相会談で明らかになったのは「北方領土の主権はロシアにある」というロ側の基本的認識である。大戦時、日ソ間には「日ソ不可侵条約」が締結されていたが、これを一方的に破棄、日本への宣戦布告をすると同時に日本領に侵攻した。終戦一週間前のことだった。その戦争成果が北方領土だと改めて強調し宣言したのだ。

■そこには日ソ不可侵条約破棄／裏切り行為に対する一抹の顧みもない。何事もなかったというロシアの姿勢／認識が見て取れる。国家間交渉／了解事項が、いかに儂くも脆いものかが解る。日韓の戦後処理に向けた合意／協約破りにも、同じ流れを感じる。一方、米国トランプ政権はじめ、世界的にも自国ファースト／自国第一主義が台頭している。全体最適至上を殊更に強調する気はないが、個別至上の流れに怖さを感じる。（藤見）